

富士山と月見草

「週末寸言」原稿 20080607

富士北麓の観光みやげ物店に行けば、「富士には、月見草がよく似合う」と書かれた絵葉書、葉、置き物などがたくさん売られている。これなどは、出典にも当たらず、意味も不明のままに作って売られている典型的観光「名物」であろう。

言うまでもなく、これは太宰治の作品「富嶽百景」からの引用である。昭和13年の初秋、左翼運動に頓挫して心身ともに憔悴した太宰は師と仰ぐ井伏鱒二に誘われ、甲州御坂峠の天下茶屋に3ヶ月ほど逗留した。デカダンス作家と揶揄された太宰ではあったが、これが機縁となつて短い生涯でも心身の最も充実した時期を得たのである。

そんな山暮らしのある晴れた日、湖畔の河口村郵便局に留め置きの郵便物を取りに行った帰りのバスの中でのこと、女車掌の「みなさん、きょうは富士がよく見えますね」という言葉にうながされて、リュックサックを背負つた若いサラリーマンや、芸者風の女

などが、「からだをねじ曲げ、一せいに車窓から首を出して、いまさらのごとく、その変哲もない三角の山を眺めては、やあ、とか、まあ、とか間抜けた嘆声を発して、車内はひとしきり、ざわめいた」

そんな中に富士とは反対側の席に腰掛けて御坂の山路をじつと見ていた憂いを含んだ老婆がいた。彼女は、「ぼんやりひとこと、『おや、月見草。』そう言つて、細い指でもつて、路傍の一箇所をゆびさした。さつと、バスは過ぎてゆき、私の目には、いま、ちらとひとめ見た黄金色の月見草の花ひとつ、花弁もあざやかに消えず残つた。

三七七八米の富士の山と、立派に相對峙し、みじんもゆるがず、なんと言うのか、金剛力草とでも言いたいくらい、けなげにすつくと立っていたあの月見草は、よかつた。富士には、月見草がよく似合う。」

劣等感に苛まれたこの作家には、すつくと屹立した独峰富士はまぶし過ぎる。月見草は富士の見えない山路側に生えていたのだ。富士に似合うどころか、その位置関係は真反対だったのである。